

るといふ事が盛んに噂された、何分針女達は年の若い者ばかりであるから、年の若い男から言葉をかけられて、胸をわらくして憤り出すといふ筈はない、併し苟くも身大奥に仕へる者が、ソんな事があつて萬々一間違ひでもあつては風儀上捨ておけない事になる、ソレかと云つてコンな詰らぬ事を表向きに忠告も出来ぬので、或時宮中にお出入りをして居る某女史から、奥向きへ物の次手に忠告して貰つた、すると某女官はむツとして、御注意は難有いが、此方は此方で取締る所をチャンと取締つてあるから、決して御心配には及びません、憚りながら大奥からは一人たりとも、左様な不品行者は出しませんから御安心下さいと云つて、サテそれから滔々として宮内大臣の悪口を並べ立てた、妾しどもに左様な忠告をするのは、源は必ず土方さんに相違ない若しソノ忠告が土方さんから出たものとする

ば、ソれこそ片腹痛い事である、宮内大臣だの何んだのと云つても、ソノ人の品行は何うである、此間も廣嶋で斯うくした事があるではありませんか、と新聞で讀んだ土方氏の艶聞を、憚る所なく述べ立てたので、流石の某女史も散々に云ひ捲られて、敗亡して引下つたといふ事である、斯んな有様で、女官達も、なか／＼喰へない所がある

元來土方伯は、女官の一部には餘り受けが宜しくない、と云ふのは聊か理のある事なのだ

餘程以前の事であるが、今上天皇が御八才の時分、まだ東宮にも立たせられず、春宮と仰せられておいでの頃、或日先帝が土方伯を御前にお召しになつて、御養育主任を仰せつけられた、トコロが何

分大奥の勢力が強くて、皇太子の御養育などの事に就ては、必ず嘴を容れるに極つて居る、ソレに背けば意地わる女官から内奏などいふ事をして、此方を苛める、併し陛下が今、多年大奥任せであつた御養育の大任を、我々にお移しになるには（當時春宮殿下の御養育は、中山局と高辻侍従が承まはつて居た）必ずや大奥で御養育申す事の、時勢に伴はぬのと、弊害のある事を御看破遊ばれての上の事であらう、と斯う土方伯が考へたので、陛下に對し奉つり「殿下はゆく／＼萬世一系の御皇統を繼がせ給ふべき、金枝玉葉の御身の上で御座います、唯今ソノ御養育の大任を臣に御任せ下さる上は、一切を御一任あらせられて、御養育上の事に就ては、兩陛下と雖も決して御助言相成らず、況して其他の者など、何人と雖も嘴を挟む事はならぬといふ事を、御聖許相成らば、お受け致します」と申上げ

た、スルと陛下には快よく御諾ない給ひて「卿に一任す」と仰せられたので、忽ちコノ御養育の大權は土方伯の手に歸して、大奥ではコレに對して手も足も出ぬ事となつた、陛下が一たびソノ臣下の人物を御信任遊ばされて、少しもソノ間に御疑念を挟ませられなかつたのは、實に聖徳の宏大無邊な所であつた
かくて土方伯が御養育主任となつてからは、殿下の御養育方針が忽ち一變して、今まで多くは御内方のみお在ました殿下が、屢々學校とか兵營とか、會とかいふやうな所へ行啓になるやうになつた、で、大奥の或る一部ではコレを批難して、ア、いふ風に輕々しく御養育申上げては、如何にも御威光に關はるとか、御氣質が荒々しくなられるとか、いろ／＼にケチを附けて居たが、何うする事も出來ない、又た或時、土方伯が殿下を兵營に御供をした折、殿下はフト

兵士の背囊をお認め遊ばされて「土方、アレは何んだ」と仰せられたので、伯は「背囊と申しまして、兵士がアノ通り背に負うて歩きますもので、中にはいろ／＼の物を入れて居ります」と申上げると殿下には、子供心に大變御氣に入つて「アノ背囊を持つて来い」と仰せられる、畏こまつて直ぐ御目通りに供ると「コレを持つて歸つて負うて見よう」と仰せ出された、土方伯も途方に暮れて「コレは餘り大きくて重くて、迎も殿下の御背中には合ひません、左程にお望みとあれば、別によいのを拵へて差上げます」と申上げて、其後直ぐ小形の背囊を調製して殿下に差上げた、スルと殿下は非常なお喜びで、毎日々々コレを御背中に負うてお遊びになる、學習院へ御通學遊ばさるゝやうになつてからも、コレをお離しならなかつたので、果ては同院の學生も皆な殿下の風に倣つて、背囊を負うて通學

するやうになつたのである
 コレが亦た大奥の或一部の氣に喰はない、ア、いふ一兵卒の御姿をおさせ申して、背囊などを負せ奉つるは何うも畏れ多い事であるとか何んとか、手を變へ品を變へて、土方伯の御教育方針に反對をして居た、けれども矢張りコレも縁の下の力持ちであつたソレから殿下は、是迄先帝に御對顔あらせらるゝにも、一定の御日取があつたものであるが、土方伯はコノ制度も打ち毀してしまひ、御父子の御合柄の事、斯様な御究屈の掟ある可らず、と云つて、何時でも御對顔が出来事とした、コノ事も例の大奥の一部に不平があつて、土方のヤリ方は何うも亂暴で、宮中の嚴肅なお掟を破るものであると、亂臣賊子のやうに云つたけれども、既に御養育の全權が土方伯の手にあるので、畢竟何うする事も出来なかつたのであ

る、斯る次第で土方伯は今でも宮中の或一部から快よく思はれて居ない、従つて新聞紙の浮名で以て、江戸の仇を長崎で討たれたやうな譯である

一八 女官の女官たる所以

明治天皇陛下所謂新しい女

井上通泰翁女官の縁談

皇太后陛下が歌道に御熱心であらせられ、各女官を御奨勵遊ばされた事は明治天皇陛下と御同様であつた、されば各女官は常に陛下の左右に近侍して、御兩方の御風懐を十分に拜する事を得て居るだけに、また兩陛下直々の御慈愛を受けて居たのであるから、明治天皇崩御以前、御席中からソノ心を苦しめて眞心から御平癒を祈り、身を以て代り奉つらんとまで神佛に祈誓を籠めた方々も少なからずあ

つた、然るに陛下には、かく宮中に於ける女官達の眞心からの祈誓も、國民一般の赤誠もソノ甲斐あらせられず、明治四十五年七月三十日つひに崩御あり、同年九月十三日青山で大喪儀を執り行はせられ、翌十四日伏見桃山に御歛葬遊ばされたのであるが、コノ時に於ける各女官の愁傷といふものは、殆んどソノ絶頂に達したのである。陛下崩御の後、宮中喪仰せ出されて、女官達は一樣に喪服に更められ、出仕、休息、ともにソノ音を立てる事もなく、コノ時ばかりは眞に大奥は死せるが如くに見えた、宮中に於て陛下の靈柩が、殯殿に移御遊ばされた時、或る女官などはコレをお廊下にお迎ひ申して、泣伏したまゝ起つ事さへ叶はず、漸やく人に扶けられてソノ局に歸つたのであるが、ウンと氣絶してしまつたので一時大騒ぎとなつたが、人々の手當によつて纔かに息を吹返した、コレなども

如何に陛下に對し奉つり痛悼愛慕の念に堪へなかつたかといふ事を
 知るに足ると思ふ
 ソレよりも尙ほ哀傷の光景を見るに忍びなかつたのは、明治天皇
 の靈柩今や宮城を出て、青山葬場殿に嚮はせられむとした際の事
 ある、喪服を着けた各女官達は、宮城内或る一定の場所に於て、お
 見送りを申上げたのであるが、唯だ一人として顔を上げる方がない、
 殆んど聲を擧げて泣き崩れたといふ事で、中には御名残を惜しみ
 足らぬ女官の如きは、途中まで駈けつて更に再び御見送りをした方
 もあつたこの事である
 斯ういふやうに女官達が陛下を愛惜し奉つる事は、決して今に初
 まつた事ではない、明治天皇が京都から都を東京に遷し給うて、陛
 下いよく、東京千代田の皇居に移御遊ばさるゝといふ時に、第一に

コレと反對したのは女官であつた、陛下を東京（當時江戸）に移し
 奉つるのは、敵の手に奪はれてしまふやうに考へて頻りに遮つてい
 る／＼の邪魔を試みた、當時陛下の左右に侍して居た人達は、從來
 の公卿達ではなくて、多く所謂維新の功臣達であつたので、女官の
 勢力を粉碎して、直ちに陛下を東京に移しまゐらせるのはさして難
 事ではないが、コレといふのも一つは女官達の思ひ過しに出でた
 もの、亦た忠義心から出でたものに相違ないから、頭ごなしに、コ
 レを挫いてしまふのも然る可らざる事亦々女官を無視するのは朝規
 を輕んずるにも當り、且つ後日如何なる仇を構へられるかも知れぬ、
 若かす此際女官達の誤解を釋いて、機嫌よく感情を融和しておくに
 はといふので、時勢の關係から、遷都の必要ある事、是からの陛下
 御身の上のいよく、御安泰にして且つ御武運の開け給ふべき事など

を女官の一部に説いたのである
 コノ説を早く了解したのは、今の新樹局といふ高倉典侍である、
 高倉典侍はソノ當時まだ年も若くあつたが、頗る賢明な婦人で、他
 が頑固であつたに比して餘ほど頭が開けてゐたといふ事である、ソ
 コで、いよく陛下には東京に移られたが、女官達もまた東京の宮
 城へ移つた方も、京都にとどまつた方もあつた、東京に移つた方々
 は、宮城に入る時に、何時敵に狼藉を働かれ事があるかも知れぬ、
 また如何なる憂目に遇ふかも知れぬと云ふので、各手に短刀の鯉口
 を寛ろげて入城したといふ、今から思へば頗る滑稽に近い話である
 が、ソノ當時女官達はコノ位の覺悟で居たものだといふ

併し今の女官は、斯うまで開けない頭を持つて居ない、昔の女官

の世間をまるツ切り知つて居なかつたに比して、今の女官も同じく
 世間の事は餘り知て居ないながらも、ソレでも今も尙ほ世間は明治
 維新當時と同じものであると思つて居るやうな方は、先づ殆んどな
 いのである、就中、割合によく知つて居るのは、婦人社會の事であ
 る、たとへば宮中の女官達は、なほ下田歌子女史の、女流に傑出し
 て居る人である事を知つて居る、また跡見花蹊女史の名もよく記憶
 して居る、所謂新しい女の柴田環とか、松井須磨子とか、平塚朋
 子などの名はまだ知らぬやうであるが、下田女史や跡見女史は、宮
 中でも特に有名なもので、女官達も下田歌子女子に對しては、多く
 敬服して居る模様である

ソレから意外なのは、女官達が特に與謝野晶子女史の名を知つて
 居る事である、女史の如きもまづ新らしい女の部に編入される資格

のある婦人と思ふが、前の柴田女史や平塚女史一輩が知られ居らぬに比して、特に與謝野女史の知られて居るのは少と訝かしいやうであるが、コレは與謝野女史が歌人であるといふので、何時とはなしに知れ渡つた次第であらうと思はれる、然らばコノ與謝野女史の名を記憶する女官達が、與謝野女史ソノ人の所謂新派——既に新派と稱ふの安當なりや否やは別問題として——新派の歌を一つでも知つて居るかと思ふと、ソレはまるつ切り知つて居ない、或ひは新派の和歌といふものが、世間にあるといふ事も知つて居ないかも知れぬソノ人の名を知つて、ソノ人の歌を知らぬといふのは少と迂濶のやうであるが、ソレよりもなほ迂濶な實例がある、歌人井上通泰翁が、宮中御歌所の寄人である事は誰も知つて居る、そして同翁が御歌所の一人となつたのは、さして餘り古い事でもないけれども、而

も同翁が御歌所の所員であるといふ事を、明治四十五年春の御歌會まで知らずに居た女官があつたさうだ
井上通泰翁の御歌所所員たらんと希望は、随分久しき以前からの事であつたさうだが、翁をしてソノ志を果さしめたのは、前侍従長の徳大寺實則氏であつた、徳大寺侍従長が、初め翁を先帝陛下に推舉するや、陛下は「さらば井上の歌を差出させよ」との勅諭であつたので、徳大寺公は井上翁に「コノ事を傳達し、井上翁は喜んで自分の歌を徳大寺公に托した、ソレを徳大寺公から御前に奉つると、陛下はソノ歌を樹はせられたけれど、更に御叡感の御様子がないのみか、佳作であるとは思はぬといふやうな意味の大御言葉を御洩し遊ばされた、勿論陛下の御歌風と、井上翁のとは全然異つた點があるので、偶々陛下の聖鑑に入らなかつたのかも知らぬが、兎に角陛

下には御感服遊ばされなかつたのは事實である、而も徳大寺公の盡力によつて、井上翁は御歌所の所員となり寄人仰せつけられた譯なのだ

トコロがまたコノ寄人であるが、コレは奏任待遇である、然るに井上翁が御歌所へ入るとイキナリ此の寄人奏任待遇仰付けられたので、同翁は大いにコレを名譽とし、中途から御歌所へ飛こんで、イキナリ奏任待遇寄人になつたものはない、然るに自分はコノ前例にない所の寄人になつた、實に難有い仕合せであると満悦した、併し井上翁は歌が特別にうまいによつて、コノ寄人を贏ち得たといふ譯ではなくて、同翁は曾て高等官三等かの身分であつて、自然相當の位階をも有する人であるから、自然數によつて寄人になつた次第である、ソレを氣づかずして悦んでゐるのは、少とをかしい話だとい

ふので、御歌所の人々はいふに及ばず、誰も彼れも一時蔭口を叩いたものだ

コンな譯で、御歌所寄人井上通泰の名は、宮中歌人仲間に藉甚たるものであつたに關らず、歌を以て三度の食事同様に心得て居る女官にして、同翁の御歌所所員である事を明治四十五年春の御歌會まで知らなかつたといふのは、頗る迂濶と云へば迂濶である、而もソコが女官の女官たる所である

迂濶斯の如くであるけれども、併しコノ別世界に隔絶して居る女官達にして、近時漸やく世間の風潮に觸れんとする機會が出来て來たのは否む可らざる傾向である、コ、には態とソノ名を署する事を遠慮するが、某女官が縁談が持上つたのである、女官が宮中を出で

て人に嫁するといふ事は、絶無の事ではないが、而も甚だ珍らしい事實である

サテその女官の縁談先はと云へば、ソレは陸軍の將校であつたといふが、ソノ女官もいよく先方へ嫁く事に決心して、宮中をお暇賜つて親元に歸つて居たが、何分永年大奥のお宮仕へに、世間といふものは少しも知らない、家庭の主婦としてはトテも納まりさうにないので、親元でも心配して、兎に角女として、煮炊の術を知らぬのは差當り不都合であるといふので、毎日臺處で責め倒して日常料理惣菜法と云つたやうな事を習はず、女官は大きに困り切つたが、ソレでも煮炊は厭だとも云ひかねて、いつでも釜の底を焦がしては食へぬ飯ばかりこしらへて居た、スルト一方の陸軍將校は、ソノ噂を聞いて、今更ソんな事を習ふやうで何うなるものかと思つて居る

矢先、或る友人から、女官なんか妻に貰つて何うなるものか、一生お引ずりで置くと了簡なら兎も角、さうでなければ止すがよからう」と忠告を受けて、つひに縁談はソレ切りとなつたから、女官も止む事を得ず再び大奥に奉仕して、今でも現にソノ職に居る

コレなどは唯だ女官が實世間の人とならんとして、なり得ずに終つたといふ一の失敗した實例に過ぎぬが、女官の境涯は、今日以後なほ今迄通りで押通すとなれば外界の日に月に變化の多い風潮と益々隔絶して、女官はつひに全く古への人となつてしまふであらう、否、今すでに大奥の女官達は、古への人なのである

物の矛盾は、つひに大破壊の日のある事を覺悟しなければならぬ、大正の女官は、いつか改革、或ひは變廢の運命に遭遇する事を、免がれようとは思はれない

一九 楽しい日

針女等の樂日——天長節の御馳走

女官の好みは云ふまでもなく萬事古風にあつて、新趣向にない事は今更らいふまでもないが、併し近來女官の局の中には多少の新らしい西洋雜貨などの並んでゐるのを見る、コレは女官其人が必ずしも好き好んで買求めたものではない、ソノ内の幾分かは、多く針女等の内からの使ひ物などに受けたものである

針女は前にも記した通り、彼等の多くの家庭は、大概中流のものばかりであつて、差當り今日に困るやうなものがないので、お宮仕へに出してある娘の身の上を案じる餘り、益暮は無論の事、何かの折には女官の許へ使ひ物をして、ソノ御機嫌を取つておくのを普通とする、コノお使ひ物がないからと云つて、何も女官たる者が、針

女に當り散すといふやうな理屈はないが、コレを親元から貰つた女官は、また別段にわるい氣もしないので、一層針女に眼をかけるやうになるのが人情だ、斯ういふ次第で、女官の局には、新らしい雜貨などが装られてあるのだ

トコロがコノ女官にお使ひものをすると同時に、是非とも此他の方面にお使ひ物をやらねばならぬ處がある、ソレは例の針女取締りである、若しコレを略してでも置かうものなら、忽ちコノ仕返しにソノ針女に與へられて、一層憂目を見る事になるのだから、針女は常に親元をせびつて、取締りへのお使ひ物を要求するのは、已むを得ざるところである

コノお使ひ物の最も大切なのは、針女が初めお宮仕へに入つた時だ、コノ時はソノお使ひ物、即ちお土産の多少に依つて、先方の仕

向きの厚薄があるのだから堪らない、旦那さんたる女官達などには、ソンの浅間な事は萬々あるべきやうには思はれぬが、取締りの老針女は、打った處が腫れるよりも現金に取扱ひぶりを異にする。先づお土産でも多いと、旦那さんへのお目見えなども、餘ほどの時機を見計って、手輕に濟ましてくるが、ソレが十分でない、行きなり放題にやらされる、初めて大奥に上った時などは、針女は爲る事爲す事お清の法則に外れて居るし、言葉がうまく京風にはゆかず、ソレでなくとも年頃の娘の事だから、少しの事でも愧かしくてならぬのに、行きなり放題に取扱はれて、ブマや失敗を演じた時などは、殆んど死んでもしまひ度いやうな氣がするといふのは、無理のない事である。

斯ういふ有様で、針女の親元では、なか／＼相當に物要りがある

のだが、また針女如きでもお宮仕へをしてゐる難有さには、往々にして畏こきあたりの玉躰に觸れた物や、お手付きの品などを頂戴する事があるので、コレを身の譽れと心得て、憂い勤めも辛抱を爲するのである。

コノ憂い勤めの中にも楽しいのは三つある、ソレは旦那さんが出仕して、午後五時以後が身に暇の出来た時、次には親兄弟や親友の尋ねて来てくれた時、次には大祭日の午後、殊に天長節の午後旦那さんがおゆるりさんで宿直かけて出仕した後は、午後五時から各針女は身に暇が出来る、即ち四時半に旦那さんの夕食のお膳をお膳柵に運んでしまへば、モウあとは何うとも勝手が出来、縫物をしよ

うと、吹上の御庭へ遊びにゆかうと自由自在だ、但し御庭へゆくに

は豫て且那の許可を得て置く必要があるのだが、コレとて別段難かしい事はない、すぐ許してくれる事になつて居る、コノ時は針女等互ひに手傳ひ合つて仕度をして、御門鑑を持つて大びらにお局の御門を通る、御庭では鬼こつこや眼かくしや、追つ追はれつ大變な騒ぎだ、併しコレは午後五時頃からの事であるから、随分日の永い頃でなくては早く日が昏れてしまふから詰らない、また斯ういふ命の洗濯日は月に二度位より出来ないといふ事である
親兄弟や友達が訪問して来てくれるのも、なか／＼に針女に取つては楽しい事である、無論いつ／＼までも長時間の談話といふ事は出来ぬが、コレほど楽しみな事はない、勿論男子は父でも兄でも弟でも、面會所より奥へは一切通る事は出来ぬが、女であれば許可さへ得ればお局までも通れる事になつて居る、されば大奥の模様など

を、特に拜見したい婦人などは、針女の家へ頼んで、豫かじめ針女の許へ手紙で打合せをして置き、姉とか妹とか云つて面會にゆき、お局まで通して貰つて、目の正月をして来る者も澤山にあるこの事だ
大祭日は各局とも大へんに忙しいので、針女もなか／＼眼の廻る次第であるが、併しソレは大概午前の事ので、午後は大方一時に暇になつて樂が出来来るから、針女はのんびりする、中にも天長節の如きはソレだ
先帝の天長節は、菊盛りなる十一月三日におはしましたが、今上陛下の天長節は、八月の三十一日である
コノ日一番忙しいのは、賢所附の女官である、コノ女官は即ち女嬬であつて、特別の任務に服さなければならぬ、宮中はいつでも

カノお清が大切なのであるが、天長節は特にコレが嚴重であつて、女嬬は清浄潔白でなければならぬ、ソノ特別任務にある女嬬は、すべて賢所に附屬した別棟のお局に居るのであるが、大清と云つて、二日の夜から身を淨めて一點の汚濁をもとめず、身も心も清浄にしてさて翌くれば三日、早朝から殆んど寸分の暇さへない忙しい任務に就かねばならぬ

各局々の女官達にあつても、コノ日はばかりは例のお早番とか、又はおゆるりとかいふ事がすべてゴツチャになつて無くなつてしまつて、おしなべてコノ日の特別任務に就かねばならぬ、特別任務と云つた所で、つまりお祝日の事であるから平生のお役向とは趣が異ふのは當然だ

女官の全部は、殆んど前夜から出仕をして居るので、針女は夜の

明けぬうちから起きて、身仕度をした上、且那さんのお召替を持つてお召替所までゆく、各女官は大抵洋装になるのが習慣で、化粧、お髪上げなどコレを手傳ふ針女も大多忙を極めるのだが、女官達が斯くして御内儀へ出仕してしまつた後は、一時にガツタリと暇になつて、針女等は右のアト始末さへすれば樂々になる事が出来る

ソレからコノ日は針女達は大へんな御馳走に預かる事が出来る、ソレは且那さんのお下り物のお膳が、山の如き美味珍味のお馳走を載せてお局に下つてくるからである、コノ御馳走がお膳棚にすらりと並べられると、針女が一定の刻限にこれを下げにゆく、いづれも美事な御料理ばかりだから、見たばかりで若い娘達は、咽喉から手が出さうだ

けれどもコレは且那さんのお歸りにならぬうちに、勝手に處分を

するといふ譯にはゆかぬ、チャンとお局の中に飾つたなりで、指を
啣へて眺めて居るより外はない、何うせ自分達が頂戴する事になる
のだが、致し方がないのだ、斯くして夜十二時頃になつて、女官達
が下ツてくると初めてコノ山海の珍味が、針女達の楽しみになるの
である

二〇 女官氣質

熟せぬ枇杷の實——下田歌子と乃木大将

——「お父ツツアんで不評判

皇太后陛下の御歌を遊ばされるのは、大抵お晝から過の事で、ま
た時々典侍掌侍からの御取次で御献上物などを樹せられる

コノ御献上物の中に、夏になると毎年極ツたやうに、まだよく熟
して居ない枇杷の實がある

熟して居らぬ枇杷とは妙な御献上物である、勿論コレが熟して居
たからと申して、陛下がソレを聞召されるといふ事は滅多にあるべ
き筈もないが、兎に角熟してないといふのは、御献上物として餘程
變則の方である

コノ枇杷は、現皇后陛下が、現天皇陛下のなほ東宮に在しました
頃から、東宮の御庭に出来たものを取つて、先づ御母君なる今の皇
太后陛下に献上し來つたものだ、而もソノ枇杷の熟してないうちに
取つて差上げるといふ仔細は、至極簡單なもので、若しコレが熟す
るまで枝に置くと皇太子殿下（其當時の皇孫殿下）及び御弟君の二
皇子はコレを取つてしまはれるからである

コレに就いては丸尾御養育掛長も苦心をして「枇杷をお取りにな
つては不可ません、他に宜しいのを差上げます、コレはまだ熟して

居りません」「黄色くなつて居るから熟して居るだらう、外の枇杷は要らんからコノ木を落してやる」「ソんな御無体を仰しやつてはいけません」と頗る持餘して居たが、いつの間にか片ツ端から叩き落されるので、サテこそ未熟のうちに取つて献上するといふ習はしになつて居る、さればコノ枇杷が陛下の御手元に差出されると、陛下は「又た熟れない枇杷か」とお笑ひ遊ばされて興がらせられると申す事だ

御献上物を樹はせられて、程経てからソレを特に女官の方々にお下り物として賜はる事がある、ソノ度びに女官達は、皇太后陛下の御仁慈に富ませ給ふのに感泣する次第であるが、故税所敦子刀自が、或時陛下の御前に出て、何事か御相手をして居た時に、何かのお話に果物の事が出て、敦子刀自は殊に老年になつてからは、葡萄を

嗜む由を言上した事がある、かくて敦子刀自は御前を退けて局に歸つたが、夜に入つてから某しの命婦が、皇太后陛下の御使ひとして態々刀自の局に見えられた、俄かの事であるから、刀自は何事であるかと、口漱ぎ手水してサテ命婦に會つて見ると、葡萄を一籠、皇太后陛下より御下賜になるのだとの事で、ソノ美事な一籠を賜はつた、刀自は餘りの難有さに、殆んど感涙に咽んで、海の如き御恩恵を拜謝したが、コレは皇太后陛下、辱くも刀自の葡萄を嗜なむ由を聞召され、わざ／＼新宿御苑から御取寄せ遊ばされて、夜中ともいはず、早速コレを御下賜になつた次第であつたさうな、女官達がつねにコノ御仁慈の深きに懐き奉つるのも、尤も理りのある所である

コレは曾て先帝陛下が、故中井櫻洲に葉卷菘を御恵み遊ばされた、

名高い逸話と相對して、世に傳ふべき双美の御高德と申すべきである、中井櫻洲が或時、先帝陛下の御前に於て、御陪食を仰せつけられた時の事であつたか、櫻洲がソコに出してある御卷、莫入の中の葉卷を一本頂戴して吸つて見ると、非常に結構なものであつたから、御前を退がる時にちよつと一二本頂戴して、ポケットに入れてスタく罷り出でたが、コレを瞥と御覽せられた陛下には「中井は葉卷が好きと見える、澤山遣はせ」と侍従の方に仰せ付けられた、ソコで侍従はソノ葉卷を盆の上に盛つて、中井の跡を追うてゆき、今や御殿を出ようとすする所で、後ろから中井を呼びとめた、中井は何事かと思つて振り向いて見ると、侍従の方が盆の上に葉卷を盛り上げて兩手で捧げて居る、思ひがけない事なので中井で暫く黙つて居ると、かくくで陛下から御下げになります」とソノ葉卷をつけられた時に

は、流石の櫻洲中井先生も、穴があらば入り度いやうな氣がして、腋の下から冷汗を流すと同時に、また陛下の臣を見給ふ事、愛兒の如く入らせられる御仁心のはどに、感激措く所を知らなかつたといふ乾徳坤徳、實に思ふだに長き次第といはねばならぬ

されば女官達は、お下り物を時折下々の者にも分與して、互ひに御仁心の難有いのを感謝してゐるのだが、皇太后陛下には、大奥に奉仕する女官のみではなくて、特殊の勤務を以て仕へまつる婦人達に對しても、決して甲乙の別け隔てをなし給はぬ、皆な一樣に一視同仁の御慈愛を下さるのである、山川操子、松平信子、香川志保子などいふは、外國語の通譯として皇太后陛下の御附を勤めた人々であるが、コレらの方々も亦た陛下の深い御眷顧を蒙むつた

下田歌子女史なども、宮中へ出入した折には、陛下の難有き仰せ

を頂戴した人である、されば女官達は、コノ下田歌子女史を以て當時、我國に於ける女流中の第一人として推服して居たのであるが、殊に下田女史がなほ學習院女學部の校長であつた頃、コノ女官達の肉親、親戚にはソノ女學部に通學してゐる女生徒達があつて、下田女史の尊敬すべく、信賴すべき婦人である事を聞かされて居たので、女官達はいよく、以て同女史の學問と云ひ文才といひ、識見といひ人格と云ひ、どこに一點疵難を挾むべき點もないものとして居たのである、然るに一朝俄然として下田女史は校長の地位を去り、思ひも寄らぬ日露戰爭に於る旅順の雄將乃木將軍が、コレに代つて校長となつた、トコロが忽ち女官達の所へ、前記の生徒達から乃木校長に對する不平の手紙がドシ／＼やつて來た、女官達はもとより世間の事は何事も知らない、乃木將軍は二百三高地を陥れ、旅順を降

した猛き武夫である事は知つて居るが、アレほど名高い賢婦人の下田歌子女史に代つて、學習院の校長になつたのが何うも腑に落ちない、ソコで女生徒達の云ふ所は無理のない所だと感ずる、そして女官達一たいの評は「お父ウさまをお父ツつアん、お母アさまをお母さんと云ふやうな校長さまでは困つたもの」といふのであつた、さりとは妙な評言である！而してコノ妙な評言の真相はどうか、ソレは聞けば聞くほど噴き出したくなる珍聞である、乃木將軍が初めて學習院に校長として任命された時、將軍は同院の女生徒に對して、一場の訓示演説をした、ソノ演説中に於て將軍が「お父ツつアん、お母さん」といふ事を云つた、然るに下田歌子女史は是より先、生徒に對して「お父ウさま、お母アさま」と教へて居たのであるから、さア將軍の「お父ツつアん、お母さん」が

女生徒に異様に聴えて耳立った、ソコで歌子女史はソノあとで演壇に登って「只今乃木閣下は、お父つつあん、お祖母さんと仰しやいました、閣下はまだ新任匆々でいらつしやいますので、何事も御存じなく、お父つつあん、お祖母さんと仰せになりましたけれども、コレは矢張りお父ウさま、お母アさまと仰しやるやうになさい」と述べた、コレが即ち問題の原である

ソコで女生徒達は、コンな言葉の間違つた、軍人などの校長さんは面白くない、やはり下田女史の方がいゝと感じたのであらう、コレをソノまゝ女官達のところへ手紙で知した女生徒があつたのだ

女官達は、「お父つつあん」と云ふやうに、角張つた關東辯は大の禁物である「お父ウさま」と云ふ角の取れた關西辯、殊に京都辯を第一として居るので、サテこそ乃木大將は女官中の噂には、至極持

てない校長であつたのだ、つまり女官達は乃木大將はどんな豪い人か知らぬが、「お父つつあん」と云ふやうではダメだと思つたのである、斯くして偉大なる乃木將軍も「お父つつあん」によつて、女官達の間には當時不評判であつたとは、如何にも女官達以外の者には、思ひも及ばぬ奇妙な原因である

二二 京都圖繪

切らす八文字 田中光顯伯
 女官と世事

大正元年九月十三日、軍神乃木大將先帝の大喪儀に際し、御喪列宮城御發引の號砲が響くと同時に、ソノ自邸で割腹殉死を遂げ、妻女静子亦た良人の跡を追うて、即座に及に伏した事は、なほ世人の記憶に新らし所で、まさにソノ血の痕は、千古の史上を彩るに足る

ものである

「お父ツツアん」問題は兎も角もとして、乃木大將の偉な大人物であつた事は、女官達と雖もコレを認めて居るに相違ない、併しコレにコレノ割腹といふ事に關し、大奥に奉仕する人達の間に於て、「切らず八文字」といふ奇妙な言葉を傳唱された事がある

十文字に腹を切るといふは、切腹の法式に於て聞いた事があるが、八文字に腹を切るといふ事は、嘗て耳にした事のない法式だ「切らず八文字」とはソモソ何んな事か

ソレは元の宮内大臣田中光顯氏に對する、一種の綽名ともいふべきものであつた

「切らず八文字」といふ言葉は、ソレは高い地位に居る女官達の口

から發たものであるまいが、兎も角大奥に奉仕する、ソレより以下の判任官達さか、お端々などの口から耳へと響いた言葉である

田中光顯氏が宮内大臣をしてゐた當時の事であつた、或時先帝陛下風氣に渡らせらるゝ時に、御徒然なるまゝ、岡澤侍從武官長に仰せて、何か見て慰さむべきものを持ってまゐれとの事に、岡澤はソコなる一室中にあつた一巻の繪巻物を差上げた、トコロがコレノ繪巻物は思ひも寄らぬ吉原遊廓の状態を描いたもので、花魁が八文字を踏ん居る圖である、陛下には初めてかゝる繪を御覽せられたものだから「コレは何んぢや」と岡澤に問はせられる、岡澤は漸愧恐懼冷汗を流した、帝王に對して偽りを申上げる事は出来ぬ、おそるゝかかく「かくゝのもの」と言上し、今や御逆鱗ましますかと大い

に恐れ入ッてゐたが、陛下は更に御怒りもなく事はソノまゝになつたので、岡澤もコノ事は自分一人の胸に秘めて置いた、然るに或時新御殿の落成した砌り、陛下はコレに初めて臨御あり、左右を顧りみ給うて「コノ邊りに於て八文字を踏んは如何に」と仰せがあつたコノ御言葉からひいて宮内官等の大問題になり、ソモソモ八文字とは如何なる御古式の事であらうなご、文事秘書官長細川潤次郎に訊すやら、其他多くの學者に調べさせたが、八文字といふ古式は一向見當らぬ、問題はいよいよ大きくなつて騒いでゐる所へ、ヒヨツクラとやツて來たのは岡澤であつた、岡澤はコノ「八文字」に關しての事と聞いて、サテはと思ひ當るまゝに、曾てかくくのが事あつたと逐一白狀に及んだので、「八文字」問題はコレで氷解したが、更に斯る卑猥の繪畫を、恐れ多くも陛下の御眼に觸るゝに至らしめ

たのは、輕からぬ不注意不謹慎、亦た大不敬な事であるといふ問題が起つた、ソノ時田中光顯は赫怒して岡澤を罵り「斯様な卑猥な繪畫を天覽に供するのみか、穢らしい事を天聽に達するとは怪らぬ、貴公は切腹して罪を謝するがいゝ」と云つたので岡澤は憤然として「自分は斯様な卑猥な繪畫が、苟くも宮中にあらうなご、心得ない、コレは畢竟宮中不取締の致す所で、責任は却つて貴公にある、貴公先づ切腹するが至當であらう」とやり返したので、田中も辭窮してソノまゝ止んだ

ソレでコノ「八文字」といふ事は、當時宮中に喧しく沙汰された、大奥に仕へる人々が、田中氏を「切らす八文字」と呼んだのも、原因するのであるが、然らば女官達がコノ「八文字」といふ事を知ツて居るか何うかといふと、ソレはよく知ツて居たといふ事である

先帝陛下が、深く京都の舊風光を懐かしがり給うた事は、臣庶の疾くに承まはり及ぶ所であるが、女官達はいふに及ばず、大奥奉仕の方々には、京都出身の人々が多いので、常に京都の事とし云へば、俗間の一瑣事と雖も、記憶から逸すまいとする、女官達は京都名所圖會、花洛名所圖繪といふやうなものを精讀して居るので、鳥原の八文字などは、よく記憶して居るのであるといふ

女官達は、我々と全くの別天地に在る人達で、世上の事は何事も知るまいと一般から解釋せられて居る、而も日に日に進化して止まぬ我々の世と、雲深き九重の大奥との境界線に建てられて、永久に人間の思想と習慣とを鎖した鐵の門扉を拍つ新風潮は、何れの時あ

ツてかソノ影響を別天地の人々に與ふべきか、或ひつひに與ふまじきが、尙ほ未決の問題である

三三 松虫鈴虫

雅びたる献上物——御苑の露に咽ぶ——
哀愁一さしほに深し

ソノ季節々々によつて、各方面から色々な物が宮中に献納される、コレは一々兩陛下の御手に觸れるといふ譯でもなく、又た一々食召さるゝといふ譯でもないが、兎に角宮中に献上される程の物は、必ず多少兩陛下又は先帝、皇太后陛下、或ひはソノ他宮中に御縁故あるものに限られてゐるのは勿論であるから、献納されたもの、大部分は先づ尊とき邊りの御聖鑑には觸れるに相違ない、併し献納品は必ずしも季節に關係した譯ではなく、臨時に献せられるものと、又

は御嘉例によつて納めくれるものも少くない、中にもカノ長良川の鮎の如きは、毎年御嘉例として九重の畏き邊りに進献し奉つるもので、献納品中にも先づ目出度きものゝ一に算へられてゐる、申すも恐れ多い事であるが、明治天皇陛下には、カノ琵琶湖で獲れるといふ鯉の外、鮎が頗る御好物で入らせられた、殊に長良の鮎の如きは、香りと云い味ひと云ひ、天下一品の稱あるもので、曾て先帝陛下がコレを御賞翫遊ばされた節、「長良の鮎は殊に美味なう」と仰せあつたので、岐阜縣民はコノ御一言を非常な光榮として、爾來毎年欠さず、走りの香魚を清く氷詰めとし、縣官コレに附添うて宮中に赴き、献納する事を嘉例とし來つたものである

コノ香魚の如きは、献納後何うなるかと云ふと、宮内省に着くと直ちに大膳職の手に廻り、ソレが御料理せられて供御となるのである

るが、コレが往々女官達の御膳にも賑はふ事がある、殊にコノ香魚の如きは、先帝陛下御嗜好の御品であるから、ソレが御膳の上に見えるると、女官達は一層の敬意を表するといふ事である

コ、に最も美しく、最も風流な御嘉例の献上品がある、ソレは前記の香魚とも並び稱すべきもので、松虫鈴虫の献上である、コレは奈良の三笠山、若草山で捕へたもの一百疋を、毎年宮中に献する事となつてゐるのだ

露しげき秋としもなれば、ごこの山にまれ野にまれ、虫の音のない處はない、殊にも奈良の三笠、若草の山々わたりで鳴く松虫、鈴虫の音は、最も他に優れて美しいものである、ソノ聲の澄んでゐる點に於て、高い點に於て、他の地方に産するものに比べると、一段

秀でてゐるので、同山の松虫鈴虫と云へば、夙に歌人詩客の錦心繡腸に、言ひ知れぬ美しい響を傳へて、コレ等の人々はわざく枝をこのほとりの月明に曳き、宵々の虫の音を娛しむものさへ少くない程だ

コノ松虫鈴虫は、前記の次第で、一百疋を奈良縣から大内山に献上する、ソレで虫を捕へるには、トテも素人では出来にくいので、ソノ役目を年々虫捕りに馴れてゐる者幾人にか傳へる、ソレらの者は、苟旦にも畏こき邊りに送り奉つる虫を捕ふるのであるから、三日以前から萬事の準備を整のへ、齊戒沐浴して十分身も心も清淨に保ち、やがて定め夜の夜になると、灯火を持って山に出かける、コノ灯火が即ち虫を集める道具なので、コレを巧妙に使用して虫を手元に呼んで捕るのである

捕つた松虫鈴虫は、豫て準備へてある網籠に容れ、ソレをまた別仕立の籠に移して、新しい檜木材の丈夫な箱の、荒目に目の明いたのを外榔とし、籠の中には適宜に清い草や木の葉を入れて虫を保護し、縣官がコレを奉じて、宮内省へ献納に出頭するのだ

サテまたコノ献納になつた松虫、鈴虫は何うなるかといふと、ソレは宮内省に着くと直ちに大奥のお庭、吹上御苑、紅葉山御殿の邊の叢に放たれるのである、大内山の御庭は、普通の庭作りの様式によつてあるのではなく、可成亂雑にならぬ限り、草木自然の繁茂にまかしてあるので、殊に秋草の茂りなどは、恰がらに武藏野のソレの俤が存し、萱、薄の折重つた中から、白や、紅の萩の花が、稀れに咲きこぼれてゐる風情などは、實に奥ゆかしくも露けく涼けく拜される、ソノ松虫や鈴虫は、コゝに放たれて朝露の間に、夕

月の影らふところ、天然の美音を弄するのである。右の松虫鈴虫の献上は、右の如くに風流にして優美な御嘉例であったが、ソレが測らずもたとへ方ない宮中の愁ひをひく事になつたのは、忘れもせぬ大正元年九月初旬の事である。明治四十五年七月三十日は、明治天皇陛下御登遐遊ばされた日である、かくて陛下の御靈骸がなほ宮中殯殿にましく、て、九重は恰がらに愁ひの雲深く鎖し、涙の雨はやんごとなき御方々の、御喪服の袖に乾く間もなき九月初旬の事、奈良縣では例によつて、松虫鈴虫を献上する事になつた、併し時は是れ大喪のうちにあるばかりでなく、靈骸なほ殯宮にまします事でもあるし、旁々献上の事は心なきに似はせぬかといふ、一部の人の論もあつたけれど、外ならぬ献上物の事ではあるし、殊にコノ松虫鈴虫の献上は明治天皇世に在し

ました時分に始まつた美事で、又殊に靈骸なほ宮中にゐますとあれば、今度の献上こそ、取も直さず明治天皇陛下に對し奉つり、最後の献上となる次第であるから、献上するが然るべしといふので、サテこそソノ運びをしたのであつた。かくて奈良の三笠、若草の山の叢を出で、遠く東の空なる九重の御苑に放たれたコノ松虫鈴虫は去年に變らず美しく涼しく、而して寂しい音を秋の千草の隈々に弄し始めたのであるから、憂愁に沈み切つてゐた宮中の大奥は、一入に秋の寂しさ、悲しさの氣を増したといふ事である。明治天皇御在世の折は、よくコノ虫の音を秋の夕べの御樂しびの一とつとせさせ給うたのであるが、殊に皇太后陛下にはコノ松虫、鈴虫の音の涼々しくて、秋を深めてゆくやうな風情を愛でさせられ

御身親からも屢々御苑御散策の折など、御み足をとどめさせられて深く虫の音に御耳を傾けさせられる事があり、時折御歌など遊ばされておいでの時、俄かに思ひ出されたやうに「虫の音が清う聴ゆるに、暫く徐ろ歩かばや」と仰せられる事があつた、さういふ時は女官御二た方ぐらの御伴をして、午下りに御庭に御出ましある事など珍らしくない

されば女官達なども、陛下の御好みに倣ふといふ譯でもなからうが、一体にこの虫の音を聞く事を喜び、コノ季節になると御苑のほとり、萩薄など茂つた邊に下り立って、心耳を澄す人が多いで、多くの女官達の中には、松虫の内侍、鈴虫の内侍などいふ、頗る雅びた名をつけくれた人もあつた、畏れ多い事であるが、コノ松虫の内侍、鈴虫の内侍の名は、お上から下された日課の御題によつて、

松虫、鈴虫の秀歌を致した人達であつたといふが、惜いかなソノ名を逸した

虫の秋の、女官達の感情に及ぼす方も、亦深くして切な者がある

三三 御苑の昔

狐狸に虎の皮——犬法令の基源
赤穂城内の犬圍ひ場

松虫鈴虫の献上に關する雅びた事と、コレが大内山の叢に放たれて露に鳴いて官女達の風懷を潤ほして、歌の心を養ふ媒ちとなる事は前にも記したが、コノ松虫鈴虫が放たれるといふ吹上の御苑や、紅葉山あたりは、今でこそ爾ういふ事はないが、昔し法川柳營の時分には、コ、へ驚くべく鳥獸類が発生して、大奥御殿が大困難を感じた一場の物語りがある

明治、大正の御代と、江戸幕府時代の事を比べるのは等倫を失して居るが如く、今日の吹上御苑、紅葉山を以て、昔日のソレと比べるのは勿論當を得てゐるものではないが、殊に皇室の大奥を以て、徳川の大奥に比するものも當を得て居らぬ、併し場所は昔も今も變りがなく、徳川時代にも大奥は矢張り大奥と呼んで居たので、今假りに古い事を二三コ、に紹介して、以て往事を追想するの資料に供するものも、また全然無益ではなからうと信ずる

明暦三年に、千代田城の大奥は火を失して焼けた事がある。ソノ後何う云ふものか今の紅葉山や、吹上御苑の邊に雄子山鳥は云ふに及ばず、狐や狸が非常に繁殖した、勿論コノ邊は今の御苑のやうではなくて、尙ほ一層草木が森々として茂つて居たのと、手入が行届

いて居なかつたものと思はれる、さればコレ等の鳥獸の栖家としては頗る格好の處であつたであらう、然るにソレが日に月に繁殖するに従つて、段々大奥の御殿、御局、廊下、御臺處の邊まで、處構はず、晝でも夜でも遠慮なしに姿を現はして、少し位の追ツ立て、も容易くは動かない、人を見ても平氣なもので、何うかすると狐や狸が、孫子をぞろ／＼引つれてお臺處へ入つて来て、食物を盗んで逃げ出すなどは稀らしい事でなく、果ては御廊下の下へ巢を構へて子を産んだり、お局の前へ飛上つて互ひに巫山戯たりする、何うしても手に終へない、殊に相手は女ばかりであるから、彼等は足許を見透かして、トテも酷い事は爲得ないといふ事を知つて居る、お女中達もまた向ふが狐や狸であるから、無暗に打つたり威したりして、崇りを受けたり、誑されたりしてはならぬなごいふ婦女子普通の迷

信からして、多くは彼等の爲すがまゝに委せてあつたから、彼等は
 いよく、圖に乗つて人間を友達か何かのやうに心得て、少しも恐る
 る所なく勝手な振舞をする、夜中お局からお局へ使ひのお端々女な
 どが、長い廊下のまん中で、キヤツと云つて引ッ繰り返る、人々大
 いに驚いて駆けつけて見ると、女は眼を眩して氣絶してゐる、水よ
 薬と大騒ぎをして介抱の上の蘇生させて、さて仔細を聞いて見ると、
 お使ひにゆく御廊下の暗まぎれに、長さ五尺もある、尾の二た又に
 なつた白狐が横から飛出して、前を横切つて走つて行つたので、吃
 驚したのだといふやうな始末で、何うも狐狸の跋扈には殆んど困
 果てた揚句、到頭コノ趣を、當時大奥第一の勢力家であつた右衛門
 佐の局へ斯くと申出で、何んとか狐狸を却けるお考へを願ひ度いと
 いふ事になつた、コノ右衛門佐局といふ婦人は、元京都の禁裡に於

て常磐井局と云つた、ソノ容貌と云ひ器量と云ひ、また學問品才と
 云ひ、ドコに一點批點の打ち處のない婦人であつて、殊に時の將軍
 綱吉公の寵愛を、殆んど一身にあつめて居たのであるから、ソノ勢
 力といふものは非常なものである、カノ京都に居た國學家で、ソシ
 て歌と俳諧に聞えた北村季吟を將軍家に推舉をして江戸に召出した
 のもコノ右衛門佐局である、斯ういふ次第でコノ右衛門佐局といふ
 人は、女でこそあれなかく、豪いどころのある人物であつた、ソコ
 で局は考へた、何うしてコノ狐や狸を却けてやらうかと肝膽を砕い
 た、ソシテコ、に妙計を思ひついたのである、局は人並すぐれた學
 者でもあり、器量人でもあるから、ソノ妙計は餘程人意の外に出で
 たものであらうと思はれたが、成程妙計は妙計に相違ない、確かに
 人意の外に出でた妙計であつたが、流石に昔の女性丈けに、思附き

が如何にも古風に出来上つてゐた、ソレは何ういふ妙計かと云ふと、お局の中に虎の皮を敷かうといふ妙計だ！

抑もコノ虎の皮を敷かうといふ妙計の由つて来る所は、外でもない、虎は百獸の將軍であつて、一度び怒號すれば群獸悉く膽を破るといふほどのものであるから、コノ皮なりとも敷かして置かうならば、狐や狸などは、邊りにも近寄れぬに相違ないといふ所から思ひ附いたものである、ソコで右衛門佐局には、此由を將軍家に申して御秘藏の猛虎の皮を有りツ丈け拜借いたしたいと願ふと、將軍までが大いに感服して、成程これは妙案であると云つて、早速御小納戸の役人に命を下して、件の虎の皮を取出した、併し此時分の事であるから、いくら徳川家であつても、爾うく澤山には虎の皮を秘藏してない、有りツ丈けを方々の局々、又は重立つた室内にズラりと

コレを敷きつめたが、コノ虎の皮の威光に恐れて、狐や狸が近寄らぬやうになつたか否やは第二として、ドウも虎の皮が引ツ張り足りない、ソコで將軍家は直ちに急使を長崎に駛せて、奉行に虎の皮買入れの命令を傳へた、即ち今より以後唐船入着の砌りは、虎の皮澤山御用につき、悉く買取つて直ぐさま江戸に送るやうこの事である、狐狸を退治するのに、虎の皮を用ゐるといふ事が既に奇らしい思ひつきであるのに、ソレが不足のため買入れの使者を江戸から長崎に差向けたなどは、何うしても徳川中葉に於る氣の長さが見えて面白いと思ふ

然る所、コノ虎の皮問題からして、コレが原因となつて大變な成行を生じて來た、ソレは外でもない、虎の皮は夥しく敷きは敷いた

が何うも日本國の狐や狸どもは、昔から我國に虎のある事を知らなかつた爲めか、更らに怯めも憶せもせず、矢張りお廊下を踏み荒したり、御膳所を襲撃したりして一向退散に及ばない、右衛門佐局を初め大奥の人々、ほとく思案に餘つて居たが、コノ右衛門佐局の養女の婿に桃井内藏助と云ふ人物がある、コレが暑中見舞か何かのために、或時右衛門佐局に面會した、スルと局は狐狸で困つてゐる事を語り出で、何んとかコレを退散する方法はなからうかと聞く、と内藏助は思案をして、すべて爾ういふ獸は、犬を畏れる事甚だしきものであるから、犬を飼つたならば、自然とソノ狐狸の類ひが出ぬやうになるであらうと献策した、右衛門佐局はソノ言葉に従ひ、いろく人に頼んで多くの犬を大奥にあつめたところ、如何にもコレは忽ちにして験が見えて、狐狸のともがら一齊に姿を没し、虎の

皮よりも遙かに機能があつたので、大奥では非常な喜びである

トコロがコ、に護持院隆光といふ坊主がある、コノ坊主は時折御殿に參候して、随分奥深いところまで一種の勢力を揮つた者だが、コノ坊主所謂善智識といふ側のもものではなくて、いづれかと云ふと柳營の内部に害毒を流した坊主である丈けに、いろくの事を云ひ觸す、或時コノ坊主が、將軍綱吉公の母堂に御目通りをした砌り、母堂が右の狐狸の話をして、コレを犬で以て退けたといふ事を聞いた、ソノ時コノ隆光坊主口を開いて「サテく奇特な事で御座る、謹んで當將軍家の御干支を稽がへ奉つるに戌に當らせ給ふ、ソノ犬の奇特によつて狐狸の害を斥け給ひし事、深き因縁おはしますにや」なご、言上した、母堂には如何にもと御感あつて、此趣を早速將軍家

に話すと、綱吉公また大いに感歎し、何んでも犬を大切にせねばならぬといふので、コ、に、犬を殺す者は死罪、虐ぐる者は牢獄といふやうな、頗る峻烈な禁令を天下に發布して、國民に一方ならぬ苦痛を與へた

コレに關聯して、カノ淺野長矩の遺臣大石良雄が、赤穂の城を將軍家に明け渡す際に、當時如何に犬を大切にしたものであるか、否大切にさせられたといふ事實が発見された、ソレは人も知る如く、カノ淺野長矩は、殿中に於て私怨から吉良義英を斬りつけた科で、即日切腹を仰せつけられ、赤穂の城は開城して、城代大石良雄の手から幕府の手に引渡す事となつた、コノ城の受取りのために、當時幕府から赤穂に出張したのは、荒木十左衛門と榊原采女の兩人であ

ツたが、やがて城を受取つて城内の検分をすると、丸の内の一隅に圍ひ塙を造つて、コ、に多くの犬を容れてある、つまり犬の逃走を防いで、何十何疋確かにお渡し申すといふ設備であつたので、荒木榊原の兩人は、殊の外大石の用意周到なのに感服したといふ事である。コレに徴しても、當時は如何に犬を尊重したものであるかといふ事が分る
然るにコノ城の受渡しに滞りなく完了したので、更に幕府の命令で一時コレを預つたのは播州の脇坂侯であつたが、カノ犬どもは毎度ソノ數を讀んでは、大切に見張番をしてゐたのであつたが、何うした拍子であつたか、一疋不足してしまつた事を發見した、無論犬は一々最初から帳面につけてあつて、毛色から身の丈け、格好から年齢、スツカリ分るやうになつてある、何分一疋不足したとあつ

ては、大變な手落になり、係りの役人などは、コレが爲め御役御免になるか、腹でも切らされるかといふ次第、何うも大變な騒ぎだ、ソコで帳面と照し合して見ると、赤斑が一疋足らぬ事が分つた、何うせ逃げ出したに極つてゐるといふので、人手を八方に分けて捜した方が更に分らない、殆んど困り切つてしまひ、係りの役人などは顔色してをなくしまつてゐる、スルト大工の某しといふ男が、ドコから捜して来たものか、ソノ逃した犬と同一やうな赤斑を一疋連れて来てくれたので、辛くもコレで間に合して事なきを得たといふ、コンな事は餘談であるが、初め千代田の大奥の狐狸退治事件から引いて、コンな事にまで立至つたといふ例證を擧げるために記したのである

次手に右の虎の皮と一對の滑稽な話を紹介する、而もソレが同じ吹上の御苑に關係あり、時の大奥の女房にも關聯してゐる話であるから、まるで縁故のない飛離れた事ではない
 漏れ承はる所によると、吹上の御苑には丹頂の鶴が飼養せられてあり、常に長鳴憂々として君が八千代の壽を呼ばうといふ事である、昔し徳川將軍家の折にも、古くからコノ御庭に鶴を飼養してゐた、四代將軍家の時の事であるが、或る夏の半ばに、ソノ鶴が二羽忽然として死んでしまつた、將軍家にはまだ弱年の事ではあるし、常に見て楽しんでゐた鶴が、俄かに亡くなつたので惜しくて堪らない、お傍近く勤むる所の久世大和守へ「元のやうな鶴を一羽、速やかに持つてまゐれ」と命じた、久世大和守は早速人を以て江戸中捜さしたが何處にもない、近廻りの諸侯に相談をかけて見たが矢張り誰も

飼養してゐる者はなく、殊に鶴は氣候の寒い土地でなくては栖んで居らぬ、眞夏の今時分見つかるべきものでないから、いくら將軍家の御命令でも仕方がないので、大和守は御前に出て、斯くくと言上したが上様なかく、以てお聞入れがない、是が非でも持て来いと云つて承知しない、殊に弱年であるから餘りよく理非が分らない、一圖鶴を持って鶴を持ってと地團太を踏まれるから、流石の大和守もほとく持餘してしまつた、當惑の餘りコレは大奥のお局からお取成しを頼むに如くものなしと、幸ひ自分の伯母がお局であつたので、ソコへ出向いて譯を云ひ、何んとかお取成しを頼み入ると云ふと、思ひきや伯母は以ての外の大不機嫌で、苟且にも將軍家のお望みである、ナニも世の中に無い物といふ譯でもない、何うにかして尋ねて差出すがよからうと、コレは亦た上様以上の立腹であるから、大和

守は詮方なく引ツ退ツて考へたには、トテも暖國に鶴の居よう筈はない、先づ今時分居るのは松前あたりかも知れぬと、早速松前志摩守公廣に談じて、松前へ態使ひを立て、捕獲する事となつたが、何分にも交通機關不備であつた頃の事であるから、江戸から松前までは非常な日數を費やす、ソコもお使者の役人が松前まで赴いて、種々の苦心をして漸やく二羽の鶴を捕へる事を得た

サテ鶴は首尾よく捕獲したが、コレを江戸まで送るといふ事が大變な騒ぎだ、尾羽を損じてはならぬ、到る處の海岸の村々は、傳馬次ぎにして一日も早く江戸に着するやうといふ、沿岸一帯への嚴重なお布令が廻る、鶴二羽のために大變な騒ぎをしたものであつたさうな

二四 大奥の或人

女官中第一のハイカラ——某呉服屋の番頭語る
——徳川大奥の呉服屋

女官と云へば、常にも整然とした風俗をして、既に記した通りの服装のみをして居るとやうに考へると大間違ひである、女官と雖も、出仕でない時には、或ひは今の底髪に、被布姿、殊に外出の折など普通の衣裳になる事が往々あるし既に今上陛下におかせられてさへ、普通庶民が考へて居るよりも、時にはすつと碎けた御服装にならせられる事もある、即ち夏分などは、純然たる御和装にならせられて、御晩餐の御食を召される事があると申す
先づ菊の御門五ツ所の黒絹の御羽織を召され、精巧な上布の御單衣に、仁台平の御袴と申す御服装で、御食卓に着かせられる、皇后

陛下には大抵御洋装であるさうな

女官は縞物や何かを用ひられぬのであるが、併し外出の時分には、絶対にコレが不可ないといふ譯ではない、けれどもソレがまるで普通の婦人のやうな風にも出来ぬので、可成縞柄の勝つてゐない、地色の派手なのを用ゐるから、コレを普通の婦人の服装と比べて見ると、無論大へんな相違であるから女官が偶ま宮中を出で、通る時などは、よく眼に付いて、一見して普通の婦人でよいといふ事が何人にも分る

某大呉服店の番頭の語る所によると、次のやうな事實がある
私しどの店では、屋(大奥の御用商人、女官達はコレを單に「屋」と呼ぶ事は、既記の通りである)の手からして、久しい以前から、

某々女官の御用命を蒙むツて居るので御座います、お名前はチト憚り
 かりまして申上げる事は出来ませんが、ソノ女官の方の御一人は、
 まだお年も比較的にお若いのですが、何うも呉服もの柄の見立て
 といふ事には大變な通でいらせられるのです、女官などいふ方々は、
 爾う世間とも御交際がないさうですし、私しの如きは、此店で唯だ
 一度御目にかゝつた切りですが、ソノ折は他の御方と御来店になつ
 て、二三品御用を仰せつけられたのが最初でした、承まはりますと、
 女官達の間には、呉服の柄合だとか、色合だとかいふ事は、更に流
 行だの何んだのといふ事は一切なく、在來の模様、在來の色合で通
 ツてゐるのださうですが、唯今申上げますソノ女官の方は、何うし
 た譯か柄の御注文や色合など、スツカリ時流に適合して居ますから、
 いつも店員と感心をしてゐるのです、さア、ソノ呉服は御自分にお

召になるのか、又は何うなさるのかソノ邊の事は一向存じませんが、
 兎に角時折御用が御座います
 御存じの通り我々呉服屋の方にはソノ年々の流行色といふものが
 御座います、或るお方の申されますには、流行色などいふものは當
 になつたものでない、アレはナニも世間から流行色とか、流行柄と
 かいふものを好むのではなくて、呉服屋が勝手に始めるのだ、たご
 へば去年は紫本位といふ事にして流行さしたから、今年茶にしよ
 う、また是までは元祿であつたが、今度は桃山にしようなどと、勝
 手な色合を拵へ、柄合や模様を考へ出して、今年コレが流行だと
 云ツて賣り出す、すると世間は利口なやうで馬鹿なもので、サテは
 今年成程ソノのが流行るのかと合點して、コレを拵へるといふ
 事になる、つまり新らしいものが流行し出したとすると、何んだか

流行おくれの色合柄合のものを引ッ張り出して、着て歩くのが氣耻
 加しく、また意久地がないと思ふ人達は、先を争ッてソノ新流行と
 いふ色合や柄合のものを新調する、コノ風が次から次へと移ッて、
 つひに其の流行といふものが、に成立ッてくるのだが、ナアニ元
 を洗へば呉服屋が勝手に考へて流行らせたものである、實に詰らぬ
 話だ、と斯う云ふのですが、ソレが抑も間違ひです

世間は利口なやうで馬鹿なものだと仰しやいますが、私しごもに
 云はせると、なか／＼世間は利口なやうで而も大へんに利口なもの
 です、何うして／＼呉服屋が勝手に物を考へて流行らさうなんて企
 だてた所で、決してソレが世人一般の氣風に投じて、大流行を來す
 などいふやうに淺薄なものではありません、今日我々が必須を感じ
 て居る必需品でも發明して、ソレを賣出すといふやうな事でもあれば、

ソレは黙ッて居ても一般の需用を得るに極ッて居ますが、コノ呉服
 物の如きは、ソノ一部を除いた外は先づ贅澤品です、有ッてよい物
 無くても濟まさうと思へば、ナニ高價な呉服などは求めるには及ば
 ぬ譯のものです、况んや色合とか柄合とか、ソンのものは撰ぶ必要
 のないものです、併しソレは一片の理屈であッて、世間は爾う判で
 押したやうにもゆかぬもの、色も添へねばならず、艶もなければな
 りません、ソコが即ち世間の世間たる所で、人の心といふものは實
 に妙に出來て居るものです、ソレが妙に社會の出來事と深い關係を
 持ッて居るやうです、兎に角社會に何か大きな出來事、又は目に見
 え耳に聽えずとも、潜かに人の心に印象を遺すに足るべき程の事が
 あると、人心は靡然としてコレに傾く、心裡にあれば、色外に露は
 るで、自然と呉服類や、持物の類の色合、柄合、品質、格好までソ

ノ影響が及ぼしてくる、つまり社會に人の心を沈ませる出來事があるとする、社會人心の傾向は何しても派手やかにならぬ、曇つたやうな、不透明な方へ向ふのは云ふまでもありません、コンな時に吳服屋が派手な珍柄や色合を考へついで、コレを流行らさうたつて、迎もソレが成功するものではありません、だから私しごもは社會の出來事と、人心の傾向を斯う觀望して居て、ソシテ流行の由つて來る所を研究して居るのです

話が横道に外れて誠に申譯がありませんが、ソノ女官の方がまたコノ流行色や柄合に明いのも驚くの外はないぢやありませんか、尤もコノ御方は數ある宮中の女官達の中では、第一等のハイカラで入ツしやるさうです、ハイカラと云つても、何も悪い意味からのハイカラではありません、勿論善い意味から申して居るのですから、ソ

コを考へ違ひをして頂いては誠に困ります、コノ女官の方は帝國劇場の新劇を見たといふ人です、數多ある女官の中で、帝國劇場に入つて、新劇を看たといふのは、恐らくコノ方ばかりでしやうと思ひます、ソレから感服に堪へないのは、他の女官達は、何事も京都々々と云つて、京都でなくては夜も日も明けぬやうに仰しやる、何一とつ求めるにも、東京の物よりも京都の物を求められるのです、ソレも無理のない事で、女官達の中樞になつて居る方々は、大抵京都の出身でいらつしやるからです、尤も染物などは京都が第一ですから、私しごもに於ても、京都で染めなければならぬものは、直ちに京都に廻送する事になつて居ますが、併し實際は何もかも京都で染めなければならぬといふ理屈は毫もないのです、で、女官達は、染める物などは、なか／＼東京の吳服屋などの手には渡しませぬ、悉

く京都へ直送するさうですが、前に申しました女官の方の如きは、私しどもへ悉く御一任になります、とても他の女官達の及ばない開け方で、まア女官達の中では所謂「新しい女」でいらっしやる事と思ひます、イヤ、また云ひ過ぎましたな、コノ「新しい女」も悪い意味に取つて頂くと困ります

文學者の故國木田さんの末亡人、關秀小説家の國木田治子といふお方が、三越呉服店にお入りになつた事は御存じの通りですが、何うでせう、コノ事をツノ女官の方がよく御存じでしたさうな、御存じの事は新聞か何かで讀まれての事だらうと思ひますが、或るお知合の方へ、御手紙でツノ事を書き送つて、同情に堪へぬ事だと仰しやツてたさうです、事は唯だソレ切りですけれども、女官の中ではハイカラであり、新しい女であらッしやるから、自然コンな所に注

意して居られたものと思ひます、兎に角コノ女官の方は、宮中では先づ屈指の世間通で、新趣味通でいらッしやるさうです

大奥などは、逆も世間の風の通らぬ所と聞いて居りますが、若しコレから新しい社會の風が、女官達のおいで之處に通ふものとすれば、前に申しました女官の方などが、奥秘の門の最初の開扉者でせう……右の呉服屋の番頭の語る所は、大畧コノ様な意味のものであつた、大奥と呉服屋との話の次に、徳川時代に於る幕府の大奥と、呉服屋との關係は何んなものであつたかに就て、少しく書いて見よとう思ふ

前にも斷つてある如く、今の宮中の大奥と、徳川幕府の大奥とは、比較すべき性質のものでなく、全く實質を異にしてゐるものである

事は云ふまでもない、唯だ明治、大正の御代にも千代田城内に大奥が置かれ、徳川幕府時代にもコ、に、幕府の大奥があつたといふ丈けが縁故がある譯なのだ

徳川幕府中葉以後、徳川柳營の大奥に御出入を許されてあつた呉服店は三軒あつた、コレが即ち最初から公許のもので、後藤縫殿允茶屋宗憲、茶屋四郎次郎等である、然るに徳川六代將軍家宣公の時に、ソノ奥方が京都近衛關白の姫君であるといふ縁故から、京都の呉服屋が續々として江戸に下り、筋を便り縁を求めて大奥へ入りこんだ、最初は大びらに呉服を賣りこむ事が出来ぬので、小間物、調度、女中の持物、頭の物など、色々に手を替へて賣りこんでゐて、次第に呉服の御用を聞くといふ事になつた、而もソノ遣り方が頗る狡猾で、局方は云ふに及ばず、女中の端にいたるまで、片ツ端から

色々の物を贈り、紅とか白粉とか、其他女中の喜びさうな品を贈るから非常に評判がいゝ、爾うなると今度は後藤、茶屋の手代どもの中には、見すゝ京都の者に甘い汁を吸はれるのが、如何にも馬鹿々々しい、少しするく立廻りさへすれば金が儲かる、相手は世間知らずの奥女中の事だから、此方の持つてきやうで何うにでもなるといふので、主人の處を無理暇取つて、獨立で一個の呉服屋として大奥に入りこむ、併し爾うく無暗矢鱈には入れぬ事になつてゐるので、最初は奥向の役人へ袖の下といふ鼻薬をかひ、コレを納得さしてうまく入りこむのである、昨日までは主と頂いた後藤や茶屋を、今日からは商賣仇にして大奥の歡心を買ふに努める、京都派と、江戸の謀反派とが賄賂、使ひ物の競争をして、一人でも多く得意を取らうと鎬を削る戦ひである、コレに引かへて後藤や茶屋は、今更ら

マサカニ爾んな卑劣な事も出来ず、飽まで高尚に構へてゐるから、つひに大奥にはトンと評判がよくない、大奥の女達は、お定りの染物とか、生地とか、極り切つたものは仕方なしに後藤や茶屋から取つたけれど、其他一切のものは他の呉服店から取る事となつたコンな有様であつたから、前記二派の争ひと云つたら實に凄じいもので、何うかして大部分を得意に取つてやらうといふ野心から、手を替へ品を替へて女中を引ッ張り合ふ、是らの奥女中が、一團隊になつて宮詣りなどをする時は、コレを途中に要して、一同を料理屋に誘きこんで御馳走をするなどいふ、悪辣な手段を用ゐて、利慾と義理とでは是非御得意にならねばならぬやうに仕向けたものである、斯うなると奥向きの女達にも最負々々の呉服屋が出来て、今度何々の店では斯うは斯う云ふ染色を出したと甲が云へば、乙がまた何々の店では斯う

云ふ新柄を織り出したなど、互ひに誇り合ひ張り合ふといふ有様に
なり、其間に種々な弊害が起り、殆んど始末に終へぬ事になると同
時に、追々どコノ事が表御殿にも分つて来たから、殿中に於て新た
にコレ等諸商人に對する取締規則といふやうなものを設け、弊害の
防止策を講じたから、疾くから息を呑んでゐた後藤、茶屋の面々、
敵陳を踏み碎いてお得意を奪ひ返す時はコノ時なりと云ふ意氣をみ
で、贈り物や賄賂や、敵の故智を踏襲して、人氣を回復しようとな努
めたが、コレにも弊害が生じて、又々新規則で取締られた
コンな有様で、徳川時代の太奥といふものは、なか／＼風紀が紊
亂してゐたのである、コレ等を考へると、今の九重の大奥の清淨で
ある事が、如何にも尊とく、氣高く思はれるのである

二四 大正の御世

歌やいかに——稿畢る

我が聖代の頁は翻へされて明治の御世は大正の御代となつた、而も九重は雲深くして大奥の御事ごもは、庶民詳らかにコレを窺ひ知る事を得ぬ、大内山の禁苑に、たもとらひする多くの佳嬪麗姫たちは、陽炎ふ若草に春の日影を美しと看、降るわくら葉に夏の夕暮を静けしと思ふ、ソノ折ふしの歌や如何にとしのぶみである

女官たちの此の人々の事は、尙ほ讃ゆべく、稱すべきことが多いが、筆これを悉さざるを憾むのみ、唯だ、秋の日の晴れた窓下に、コノ稿を書き畢る

……(大正元年九月二十日)……

女官物語(終)

大正元年十月十日印刷
大正元年十月十日發行

定價金七拾錢

著作者 齋藤徳太郎

發行者 田口鏡次郎

印刷者 東京市京橋區南鍛冶町五番地 牧口駒三郎

印刷所 東京市京橋區南鍛冶町五番地 牧口印刷所

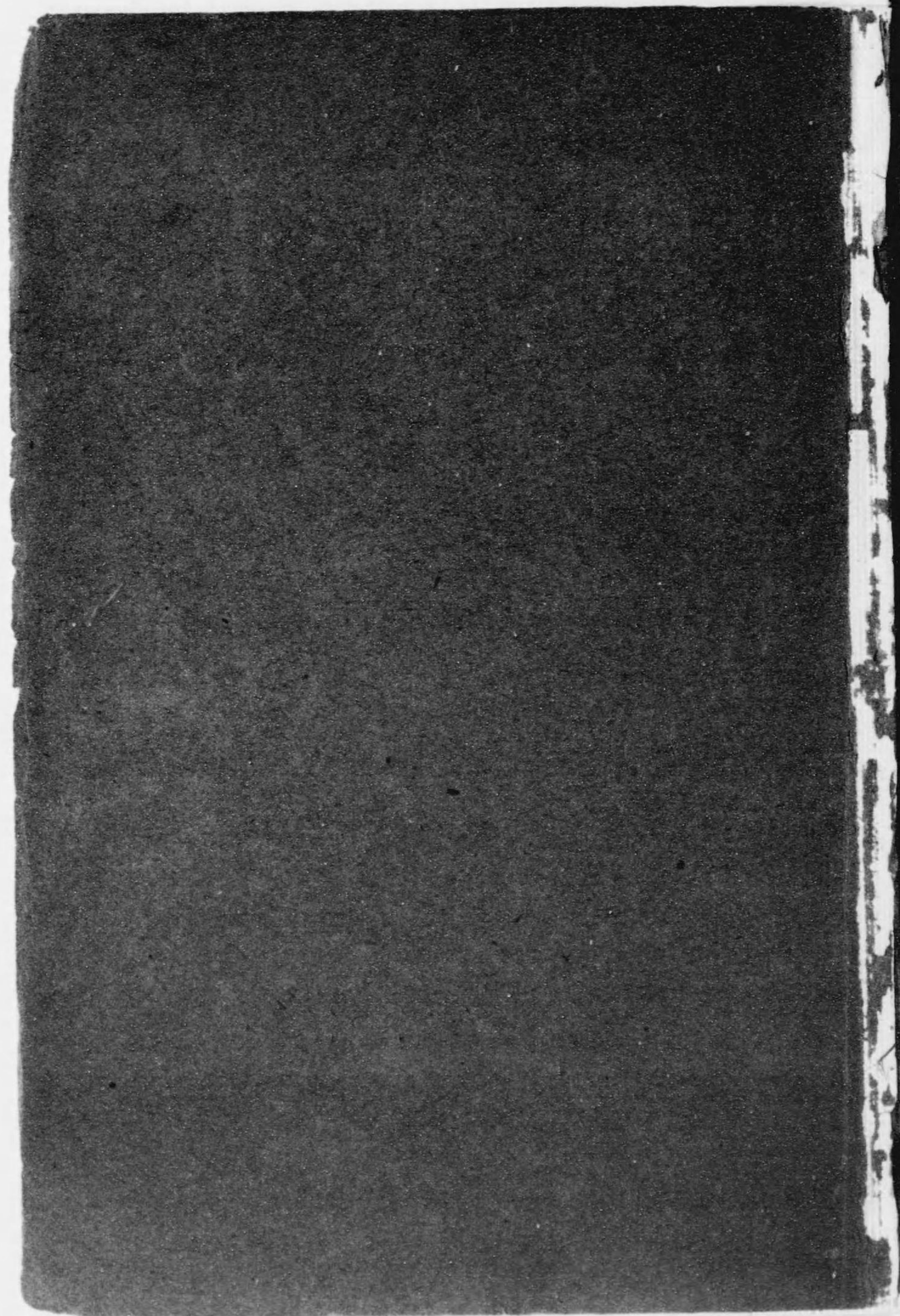


發賣元

東京本郷一丁目 日東堂書店
電話下谷四三六二番〇振替東京一二五五八番



30



332
391

終

